

天龍寺旧境内の堀

<http://www.kyoto-arc.or.jp>
(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



戦国時代の堀（北西から）

はじめに 渡月橋上流の大堰川北岸には、小倉山が迫り、その東麓の亀山は緩やかに東に傾斜しています。このなだらかな亀山を背にして、天龍寺の伽藍が東向きに広がっています。このあたりは古くから人々に親しまれ、対岸には、名勝として名高い嵐山が借景として位置しています。

天龍寺は、吉野の地で亡くなった後醍醐天皇の冥福を祈り、南北朝の戦いで犠牲となった人々の霊を慰めるために、足利尊氏が夢窓国師を請じて亀山殿の跡地に建立した臨済宗天龍寺派の大本山です。正式には霊亀山天龍資聖禅寺と号し、京都では五山第一に列せられました。堂舎造立の資金には、天

龍寺船と呼ばれた中国・元への貿易船を派遣し、その収益を充てました。

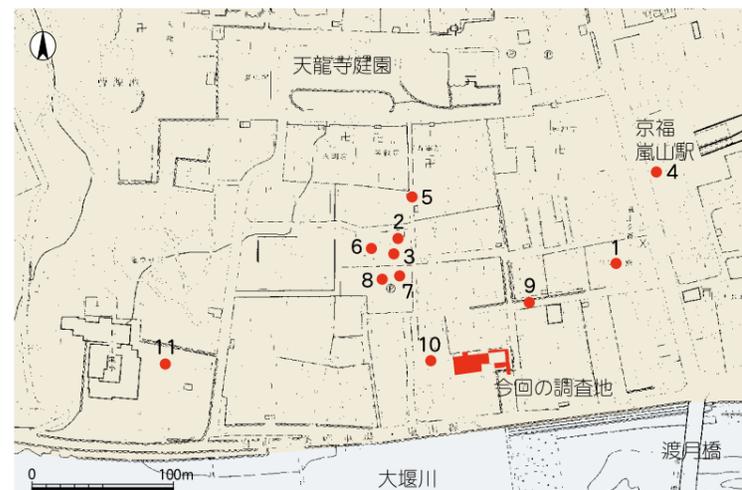
戦国時代の堀を発見 2006年6月、右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町の天龍寺旧境内で発掘調査を実施しました。地表下約1.3mで、室町時代の幅2.7m・深さ1.3mの南北方向の堀を発見しました。堀は石組で底部にも石を敷く構造で、断面の形は逆台形で、多量の焼土や焼け瓦で埋め戻されていました。

堀には3期の変遷があり、東肩の位置を同じくして段階的に規模を縮小していくことが判明しました。1期目の堀には水が流れていたことや、さらに南北両方向に延びていくことも確認しており、そ

の方向は天龍寺の伽藍配置と同じ方位の傾きでした。

史料によれば、天龍寺は創建後たびたび火災に遭っていますが、文安四年(1447)、「雲居庵のみを残し七堂・西廊が消失した」『臥雲日件録抜尤』とあり、さらに、応仁二年(1468)、「兵火で天竜寺・臨川寺を含め一帯が灰燼に帰した」『碧山日録』とあり、近い時期に続けて大規模な火災に見舞われていることがわかります。

当初に造られた堀の底から出土した土師器皿と、完全に埋没した状態から出土したそれは、ともに15世紀半ばから後半のもので、時期差はほとんどみられません。このことから、堀は短期間に埋没と



天龍寺旧境内の堀検出地点

修復を繰り返したとみられ、火災の記述とも一致しています。

また、堀の埋め土に充満する多量の焼け瓦は、周辺の瓦葺き建物や、樽敷きの仏堂に使われていたとみられ、火災の記録を裏付けました。

旧境内の堀 周辺では、戦国時代の堀(溝・濠)の発見例が多くあります。堀の種類には、今回と同様の石組構造などの堀と素掘りの堀、水をたたえる濠や水のない空堀があります。断面の形は逆台形・V字形・U字形などがあります。特にV字形のものは薬研堀と呼ばれます。幅は1m前後の小規模なもの、2m前後の中規模なもの、3m以上の大規模なものに大別されます。深さは1m前後のものと同様に深く掘り込まれています。これ



堀から見つかった焼け瓦

らの堀からは、15世紀中頃から16世紀初頭の遺物が出土します。

以下、上の地図と照らし合わせておこなったものを示します。東西方向の堀は3例あります。1は幅4.6mの大規模な石組構造で、水が流れていた痕跡がありました。2は中規模で断面形が逆台形の空堀です。3は石組の大規模な薬研堀で、7が埋められた後に造られます。

南北方向は今回の例を含めて8例あります。4は大規模で断面形が逆台形の空堀です。5は小規模ですが、深さ1.9mの深い素掘りの堀です。6は中規模の薬研堀で、12mにわたって見つかりました。7は大規模で断面形が逆台形の空堀です。西隣の8より後に造られます。8は小規模ですが3期の造り替えがあり、石組の時期もありました。9は幅1m弱の小規模な空堀です。10は大規模な薬研堀で、西側にくの字に曲がります。北東から南西方向の11は、最も西側で発見した大規模な薬研堀です。

このようにこの周辺では、大きさや方向が異なるいくつかの堀が、短期間で造り替えられていること



堀の南端の石組西壁（東から）

が分かりました。

おわりに 今回発見した戦国時代の堀も、幅に対して底部が比較的深く掘られ、防御的な性格が強いものです。この時期、京都では戦乱に見舞われ、本能寺・本圀寺・相国寺・山科本願寺などの寺院でも外周に堀や土塁などを巡らせ、防御している状況が明らかになっています。

今回の堀は、戦国時代の天龍寺境内の東側を守る堀のうちの一つとみられます。周辺で発見した堀(溝・濠)は、いずれも絵図との照合はできませんが、今後の資料が増えていけば、点と点が繋がっていき、堀の位置が復原できるでしょう。

また、堀が段階的に縮小していくことから、度重なる火災によって寺院が経済的に疲弊していく様子もみえます。

私たちが現在目にして天龍寺東限の堀は、今回発見した堀と規模や石組の形状がほぼ同じで、あたかも戦国時代の堀が再現されているかのようです。

(小椋山一良)